

オグズ・ハン記念トルクメニスタン工科大学の日本語教育 —2016 年～ 2017 年—

田中 孝始 里見 文

要 旨

トルクメニスタンの日本語教育は、2007 年にアザディ名称世界言語大学東洋言語学部
に日本語学科が開設されたことから始まった。以来、同国のベルディムハメドフ大統領
が積極的に国内の日本語教育の拡充を推進し、2016 年から日本語教育を行う機関が急増
した。オグズ・ハン記念トルクメニスタン工科大学は、日本型カリキュラムによる工科
大学設立構想の下、2016 年 9 月首都アシガバードに新設された大学である。同年、筑波
大学との間で日本語予備教育支援事業の契約が締結され、日本語教師の派遣と予備教育
課程を中心とした日本語教育が開始された。本稿はオグズ・ハン記念トルクメニスタン
工科大学の日本語教育の初年度の現場の概観、及び問題点と今後の展望についての報告
である。

【キーワード】 トルクメニスタン 日本語教育 概観 問題点 今後の展望

Japanese Language Education at Oguz Han Engineering and Technology University of Turkmenistan : from 2016 to 2017

TANAKA Takashi, SATOMI Aya

【Abstract】 Japanese language education in Turkmenistan started in 2007. Since then the President of Turkmenistan, Gurbanguly Berdimuhammedow, has actively promoted the expansion of Japanese language education. Oguz Han Engineering and Technology University of Turkmenistan was newly established in Ashgabat, September 2016 under the concept of establishing a technical college based on the Japanese style curriculum, and Japanese language education was offered mainly to those in the preliminary curriculum. In the same year, a contract for a Japanese preliminary education support project was concluded with the University of Tsukuba, and dispatch of Japanese teachers from the University of Tsukuba began. This paper is an overview of the actual situation of Japanese language education at Oguz Han Engineering and Technology University of Turkmenistan. The paper also reports on problems and prospects.

【Keywords】 Turkmenistan, Japanese language teaching, conspectus, problems, future prospects

1. トルクメニスタンの教育制度と外国語教育

トルクメニスタンは中央アジア南西部に位置し、東南にアフガニスタン、西南にイラン、北東にウズベキスタン、北西はカザフスタンと国境を接している。1991年にソビエト社会主義共和国連邦から独立し、世界第4位の埋蔵量を誇る天然ガスや豊富な石油を背景に経済的発展を続けている共和制国家である。

トルクメニスタンの義務教育は、かつては9年間であった。その後10年間になったが、2013年9月から表1のように改められた。多くは、一つの学校で初等教育から後期中等教育まで行われる。学校名は、トルクメニスタンの偉人の名前が付けられている場合もあるが、多くが～番学校のように番号で呼ばれている。

表1 教育制度（義務教育）

初等	修学年数4年(1年～4年)	対象年齢6歳～10歳
前期中等	修学年数6年(5年～10年)	対象年齢11歳～16歳
後期中等	修学年数2年(11年～12年)	対象年齢17歳～18歳

義務教育は表1で示した累計12年間で、高等教育は予備教育1年を含んだ5年間である。義務教育課程では、英語とロシア語が必修科目である。ロシア語にはテレビ番組や音楽、映画等で幼少の頃から自然に触れていることもあり、第2言語のような位置付けで多くのトルクメン人が流暢に話す。中には、ロシア語で授業をする学校を卒業し、家庭でもロシア語が使用されているため、トルクメン語よりもロシア語が得意であるという学生も都市部には一定数いる。一方、英語は必修科目であると言っても、一般的に使用されてはならず、市中ではほとんど通用しない。

2. トルクメニスタン国内の日本語教育

トルクメニスタンにおける日本語教育略史を概観したい(表2)。

表2 日本語教育略史

2007年	アザディ名称世界言語大学日本語学科開設
2013年 9月	筑波大学とアザディ名称世界言語大学で学術協定締結
2015年 10月	初等、中等教育機関での日本語科目導入の決定 東京外国語大学と国際人文開発大学間で国際学術交流協定締結

2016 年 9 月	初等、中等教育機関での日本語教育開始
	石油ガス大学、運輸交通大学、国際関係大学で日本語授業開始
	国際人文開発大学に東京外国語大学が日本語教員 1 名を派遣し、Global Japan Office を開設
	国際交流基金日本語上級専門家 1 名と日本語指導助手 1 名をアザディ名称世界言語大学と国民教育大学併任で派遣開始
2016 年 10 月	筑波大学とオグズ・ハン記念トルクメニスタン工科大学間で日本語予備教育支援事業の契約締結
2016 年 11 月	オグズ・ハン記念トルクメニスタン工科大学に筑波大学派遣の日本語教員 2 名着任

トルクメニスタンにおける日本語教育は、2007 年にアザディ名称世界言語大学（以下、アザディ大学）に日本語学科が開設されたことに端を発している。その後、筑波大学が 2013 年にアザディ大学と学術協定を締結し、2014 年と 2015 年にはアザディ大学の学生を 1 年間留学生として受け入れるなど交流が始まった。

2015 年の安倍晋三総理大臣のトルクメニスタン訪問を機に、ベルディムハメドフ大統領が初等、中等教育での日本語科目導入を決定し、日本語教育が拡充していくこととなる。2016 年 9 月からは一つの初等教育機関、12 の中等教育機関、アザディ大学以外の 5 つの大学で日本語教育が開始された。また、10 月には筑波大学とオグズ・ハン記念トルクメニスタン工科大学（以下、オグズ・ハン大学）間で日本語予備教育支援事業の契約が締結され、11 月には 2 名の日本語教師の派遣が開始された（2017 年 9 月時点では、派遣は 1 名に減少）。

2.1 初等教育

首都アシガバートの 140 番学校 1 校のみで日本語教育が実施されている。2016 年度は 1 年生 155 名が日本語を学習しており、トルクメニスタン教育省の指示により開発された小学校用教科書『日本語 1』（1 年生用）を使用している。トルクメニスタンには、トルクメン語以外の授業をすべて英語で教える、英語学校、ロシア語で教える、ロシア語学校などがあるが、140 番学校は近い将来、日本語学校として、日本語で数学や社会科学なども教育する予定との事である。

2.2 中等教育

全国 12 の中等教育機関（首都アシガバートに 4 校、アハル州に 4 校、バルカン州に 3 校、ダショグズ州、レバップ州、マリ州に各 1 校）で日本語教育が実施されている。日本語科目は週に 2 時間、年間 68 時間である。教科書は、初等教育同様、トルクメニスタン教

育省の指示により開発された中学校用教科書『日本語5』（5年生用）を使用している。

2.3 高等教育

2016年度より、アザディ大学（2007年開始）に加え、石油ガス大学、運輸交通大学、国際関係大学、人文開発大学、オグズ・ハン大学で日本語教育が開始された（表3）。

表3 高等教育機関（2016年度 単位は実数）

	大学名	教師数	学生数
1	アザディ名称世界言語大学	3	53
2	オグズ・ハン記念トルクメニスタン工科大学	10	783
3	国際人文開発大学	1	65
4	石油ガス大学	1	50
5	運輸交通大学	1	16
6	国際関係大学	2	47

アザディ大学は、トルクメニスタンで唯一日本語学科がある大学であり、国内で勤務するほぼ全ての日本語教師が当該大学から輩出されている。2016年から派遣が開始された国際交流基金海外派遣日本語専門家が日本語教授法などの授業を担当している。オグズ・ハン大学については、後述する。国際人文開発大学には東京外国語大学との提携に基づき Global Japan Office が開設された。日本人日本語教師が1名派遣されており、65名の学生が正規科目として日本語を学習している。

3. オグズ・ハン大学の教育

2015年に安倍晋三総理大臣が中央アジア歴訪の一環としてトルクメニスタンを訪問した際に、ベルディムハメドフ大統領との間で、日本型カリキュラムによる新たな工科大学設立構想の提案があり、双方が検討する用意があることが表明された。筑波大学からは、2017年にロボティクス・ICT、2018年に環境工学と物性・光工学、2019年には、ナノテクノロジーとバイオテクノロジーの教員の派遣が計画されている。その構想の下、2016年9月1日、オグズ・ハン大学が開校した。以下、オグズ・ハン大学の教育について概観したい。

3.1 予備教育と学部教育

トルクメニスタンの大学は入学後1年間の予備教育を経て、その後、4年間の学部教育を受ける5年制である。8月に入学試験を受け、9月から新年度が始まり、新入生は予備教育を受ける。予備教育期間で学習する科目は各大学で異なり、歴史や社会学を教えている大学もあるとのことだが、語学教育中心であることは、各大学共通しているよう

である。

オグズ・ハン大学の予備教育では、語学教育だけが行われている。授業科目は、英語・日本語・トルクメン語である。予備教育、学部教育ともに、授業は月曜日から土曜日まで行われる。2016年9月の開学当初は1コマを45分授業、10分休憩、45分授業と分けていたが、3月の3学期開始から、80分間休憩なしの3コマに変更された。(表4)

授業の内訳は、1グループ(オグズ・ハン大学では、クラスではなくグループと呼ぶため、以下「グループ」を使用する。)週18コマ中、英語12コマ、日本語5コマ、トルクメン語1コマである。

学部(Faculty)は、「Chemistry and Nanotechnology」「Biotechnology and Ecology」「Computer Sciences and Information Technologies」「Automatics and Electronics」「Innovative Economics」の五つに分かれ、学部生はいずれかに所属している。オグズ・ハン大学は新設ではあるが、開学に基づき廃校となった「トルコ・トルクメニスタン大学」の学生が転学し、333名が既に学部に在籍していた。各専門によりグループが編成され、同じグループが4年間持ち上がりで勉強する。単位制度は検討中とのことでまだ実施されていない。

表4 オグズ・ハン大学の授業スケジュール

授業日：月曜日～土曜日	
8：30～	学生朝礼+職員朝礼
9：00～10：20	1コマ目
10：20～10：30	休憩
10：30～11：50	2コマ目
11：50～12：10	休憩
12：10～13：30	3コマ目
13：30～13：50	休憩
13：50～14：35	Extra Lesson

Extra Lesson は各グループ1週間に英語が5コマ、日本語が1コマ行われる。

3.2 学期・テストなど

予備教育は3学期制である。9月に入学し、11月末と2月末に期末試験、6月末に年度末試験が行われる。試験期間は各1週間で、期末試験後には1週間の休みがあり、遠方からの学生は帰省が許される。試験はペーパーテストで行われる。トルクメニスタンの大学の試験は、従来はソビエト式の口頭試問とのことだが、2016年度のオグズ・ハン大学の予備教育では、英語、日本語、トルクメン語の全てがペーパーテストで行われた。試験は50%以上が合格で、不合格者は教師と学生が集められる会議で学長に指導を受け、

両親も大学へ呼ばれるなど、大学から厳しい対応を受ける。試験の結果（得点）は学部長に報告され、個々の教師は成績をつけない。また、合格点に満たない学生が多ければ落第者の人数の調整を求められる。大学の方針として、再履修や、留年という考え方はないように思われる。

また、このような定期試験のほかに、毎月、各学生のクイズ結果や授業態度の評価を 100 点満点で求められるため、課テストや会話テストを各グループで行い、担当教師がこれを記述する。

一方、学部教育は 2 学期制で、前期・後期に分かれる。前期は、9 月から 1 月で、1 月中旬から 2 月初旬にかけて 2 週間程度の試験期間がある。その後、2 週間程度の休みがあり、2 月下旬から後期が始まる。後期は、6 月中旬までで、6 月下旬から 7 月中旬にかけて、やはり 2 週間程度の試験期間があり、7 月 20 日くらいから年度末休業とのことである。

3.3 大学の施設と教室の設備

大学の施設は、本部棟、学部棟、予備教育棟、大講堂、その他、図書館、言語センターと食堂が入っている棟、ジムや球技コートがある体育館、そして男女別棟の学生寮から成る。冷暖房は、年間を通して、また一日の気温差も激しいトルクメニスタンにおいては必需の設備であり、全館に整っている。

教室は、大きく 50 人程度が収容できる比較的大きいものと 25 人程度の狭いものがある。また、備え付けのパソコンとプロジェクターがある教室と無い教室がある。パソコンには、ホワイトボードとして使用できるソフトがインストールされており板書も可能である。画像、映像教材のファイルはもちろん、教師作成のパワーポイントのファイルなども使用できる。しかし、予備教育の 22 グループのうち、数グループの教室にはこの設備は導入されておらず、視聴覚教材はノートパソコンを持ち込む、印刷するなどの対応が必要だった。また、このようなクラスではホワイトボードもマーカーの質も良くないため、教師は板書には苦勞する。そのため、視覚的な理解に時間がかかり、設備のあるグループとの間の進度に差が生じることもあった。また、2016 年度は大学内ではインターネットが使用できず、教師は教材として必要となる映像、画像、歌などのダウンロードができず、また学生の自習にとって有益な教材サイトの紹介などもできなかった。アシガバートの自宅から通学している学生の中には、自宅でひらがなやカタカナの学習アプリケーションをダウンロードし、スマートフォンにインストールし、活用している者もいたが、僅かだった。

3.4 予備教育の学生とクラス（グループ）編成

学生には制服があり、男子学生は、タヒヤという中央アジアの伝統的な帽子、黒のスーツ、白いシャツ、黒のネクタイと黒の革靴、女子学生は、タヒヤと赤のコイネクという民族衣装、黒の革靴、冬はそれに民族衣装の上着を着る。オグズ・ハン大学のある首都アシガバートに実家がある、あるいは縁者がいる学生は自宅、或いは縁者宅から通学するが、その他の学生は大学内にある寮で生活している。寮には門限があり、グループ担任の教師が巡回に回り、学生の在不在を確認する。

朝は 8 時半に集合し、毎朝朝礼が行われる。朝礼では、その日のスケジュール（イベントへの参加等）、学業、生活面など細かな注意が告げられる。遅刻者は厳しく叱責され、罰を受ける。朝礼後、9 時から授業を受ける。大学は学生の身だしなみにも非常に厳しく、爪の長さやマニキュアなどを塗っていないか、髭をきちんと剃っているか、パンツの太さ、スカートの丈などがチェックされる。これは各グループの担任教師が朝礼の際や授業中に各グループを巡回して行っている。

クラス（グループ）編成についてであるが、2016 年入学の 450 人の予備学生は、英語の試験の成績により、成績の良かったものから順に、第 101 グループから第 122 グループまで、1 グループ 17 名から 26 名までの 22 グループに分けられた。各グループには 1 名ずつ担任がいるが、22 グループ中 20 グループは英語教師が、2 グループは現地日本語教師が担任となっていた。

学生は学業に励むだけではなく、チャーレと呼ばれる、様々な Social Event への参加を義務付けられている。それは、国家的な行事への参加、ボランティアなどの仕事である。祝日の際のパレードやイベントへの参加、トルクメニスタンが国家的事業として進めている緑化のための植樹などである。これらは授業の有無に関わりなく、参加しなくてはならない。よって、教師が授業のために教室に入ると植樹ボランティアに行った男子学生を除いた女子学生だけがいるということもある。

トルクメニスタンの国家的なイベントであった第 5 回アジアインドア & マーシャルアーツゲームズ¹の際には、11 日間の開催期間中だけでなく、その前後も学生たちは総出でボランティアや観客として参加し、授業が行われることは全くなかった。これら行事への参加はトルクメニスタンの大学生にとって明確な義務として捉えられている。

2016 年 9 月に予備学生として入学した 450 名のうち、2017 年 6 月の年度末の試験で不合格者は 1 週間の補習を受けた後、再試験を受けた。再試験にも落第した学生 2 名のうち 1 名は 9 月の新学期直前に再再試験を受け、学部へと進学した。そして 1 名は結婚のためという理由で退学した。よって 2017 年 9 月現在、449 名が学部 1 年生となった。また 8 月に行われた入学試験を経て 448 名が 9 月 1 日の入学式を迎えた。

3.5 予備教育の教師

2016年当初の予備教育の教師は、英語22名、日本語8名（うち6名がトルクメン人教師）、トルクメン語2名であった。

現地教師の仕事は、教室で言語を学生に教えるだけではない。既述の通り、寮や教室での学生の生活や服装の管理だけでなく、各種イベントやボランティア活動への学生の引率など非常に多忙である。寮の門限のチェックは夜であるし、週の唯一の休日である日曜日も引率者としてイベントに参加しなければならない事もある。早朝から学生とともにパレードの列に並ばねばならない場合もあり、本来の仕事である教育や研究という分野以外での校内活動の忙しさで、年度が深まるにつれ、現地教師が疲弊していく姿も見られた。

また、年度の途中での教師の入れ替わりもあった。2016年度は、英語教師2名が途中退職し、英語教師が足りず、一時的に20グループになり、2つのグループの学生たちは他のグループに分散させざるを得なかった（後に新任の教師が入り、21グループとなった）。また、日本語教師も1名、年度の途中で産休となった。このような場合、迅速な大学の対応と欠員の補充がないため、教師が不在の間は教育現場では大きな混乱が見られた。

2016年度の予備教育の現地日本語教師は6名だった。学歴は、5名がアザディ大学の出身者であり、1名がアンカラ大学（トルコ）出身である。その他、学部には2名の日本語教師がいるが、両名共にアザディ大学の出身者である。

2017年度は、3名の教師が移動や退職、5名の新任教師が入り、12月現在で、8名の現地教師が予備教育の日本語教師として在職している。1名がアンカラ大学（トルコ継続）、1名がチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学（トルコ）、他の6名はすべてアザディ大学出身である。

4. 2016年の日本語予備教育の取り組み

オグズ・ハン大学は2016年9月1日に日本式のシステムを取り入れた教育を行う、当地では最も先進的な工科大学として開学し、同時に予備教育の450名の学生を対象とした日本語の授業が始まった。予備教育、学部を合わせてオグズ・ハン大学では、2016年度に計783名が日本語学習を始めたことになる。以下、2016年11月にオグズ・ハン大学の日本語教師として着任した日本人教師2名の取り組みについて述べる。

4.1 現状の把握

オグズ・ハン大学は2016年9月1日に日本式のシステムを取り入れた教育を行う、当地筑波大学から派遣された2名の日本人教師が最初に行ったのは状況把握、特に現地

教師の日本語力と教育能力の把握、開学から2か月間、現地教師から学習している学生の進捗や状態の観察、実際に教育を行う際の各種施設や設備の把握、教材の決定であった。それらを把握したうえで、ネイティブの教師として、オグズ・ハン大学でどのような活動をすべきか考える材料にした。

4.2 現地日本語教師との共同教育について

筆者が最初に現地日本語教師と出会った際に、会話におけるコミュニケーションが十分とは言え、理解できるレベルでとれたのは6名中2名しかいなかった。1名は、1年間の筑波大学への留学を経験していた教師、もう1名はアザディ大学を卒業したばかりの教師だった。しかしながら、現地日本語教育の現状を鑑みると致し方ないと思われる理由がある。当地在留の日本人は数十名しかおらず、また、トルクメニスタンでは、トルクメン人と外国人との接触に制限があるため、ネイティブと会話する経験は皆無と言っていい。また、既述の通り、アザディ大学以外の教育機関で日本語教育が始まったのは2016年からで、アザディ大学で日本語を学習しても日本語教師としての職業がなく、英語教師として働いていたり、教師以外の職業に就いていた者もいた。また、6名の現地教師全員が日本語教師として現場につくのは初めての経験だった。まず必要なのは、教師教育であることが明確になった。教師として学生を指導するための日本語教育だけでなく、オグズ・ハン大学の日本語教育を牽引すべく派遣された日本人教師とのコミュニケーションが十分とれるようにするための日本語教育も必要だと考えた。日本人教師と現地教師間のコミュニケーションに齟齬があると、様々な状況で多くの問題が生じる事への危惧もあった。

授業へは、2名の日本人教師が22グループすべてに隔週で1コマずつ会話中心のクラスとして入ることにした。学生に少しでもネイティブ教師の日本語に触れてもらうこと、現地教師の教育では不足していると考えられる「話す・聞く」の部分を補うこと、そして学生が9月までどのような教育を受けてきたかを、全グループを教えることで把握したいと考えた。しかし、この提案に対して、学部長から賛同が得られなかった。1グループに一人の教師担当でなければ、教師の責任の所在が明らかにならないという理由であった。しかし、2か月間、日本人教師を待ちわびていた学生もいた様子で、特定のグループにだけ日本人教師が入ることは学生からも反対があり、まずはこの方式で授業を始めることになった。

4.3 教材について

テキストについては、当初、『Situational Functional Japanese』²を使用する予定だったが、既に9月から『みんなの日本語Ⅰ』³を使用していただけでなく、現地教師全員が

日本語を『みんなの日本語Ⅰ』で学習していたこともあり、テキストを変えることは教師にとっても、学生にとっても負担になると考え、そのまま『みんなの日本語Ⅰ』を使用した。『Basic Kanji Book VOL.1』⁴については、現地教師もこのテキストで漢字を学習し、学生にも既に採用していたため、そのまま使用した。また、『みんなの日本語Ⅰ文法解説』⁵のロシア語版か英語版のどちらかを学生の希望により、既に購入済みで使用していたのでこれを利用した。副教材については、『聴解タスク25』⁶『書いて覚える文型練習帳』⁷『標準問題集Ⅰ』⁸を利用した。

4.4 日本語授業について

1グループに対しては週替わりで1コマずつではあるが、22グループ、450名の学生を教える事になり、オグズ・ハン大学の学生が全体として見えてきた。11月の授業開始当初は、1コマを2つに分け、前半45分、10分休憩、後半45分だったのだが、後に徐々に慣れては来たものの、最初は45分の授業の集中力が続かない学生が多く見られた。その理由として、講義は教師中心であり、教師の話を学生がノートにとり、覚えることが学習であるという考え方が主流であり、その場で考え、答える指導法に慣れていないためであると考えられる。次に学生のレベルには、学習者間で非常に大きな差があることが予想以上に明らかになった。無論、オグズ・ハン大学は工科大学であるため言語学習への取り組み方や理解力に差があることは予想していたが、成績不良の学生に取り出し授業を行い、日本人教師が教えたり、現地教師がトルクメン語で説明しながら教えたが、理解できない学生が多数いた。また、大学に入る前に学習しているはずの英語力の差も相当に激しいと感じられた。理解できない基礎的な単語も数多くあり、『みんなの日本語Ⅰ文法解説』の英語版を予習に利用しようとしたが、できない学生が相当数いた。平均点が70～80点の日本語テストでも、90%を超える学生は確かにいたが、100人程度は合格ラインである50点に届かなかった。

学習意欲の差も大きかった。宿題で新出単語はできる限り覚えてくるという課題に積極的に取り組まず、授業中以外に日本語に触れる意欲が薄い学生も多い。一方で、イベントなどで授業が中断されても自習を進め、教師に質問してくる学生もいる。両者の差が非常に大きいと感じられた。無論、日本に行きたい学生、行きたくない学生、或いは行きたくても家庭の事情などで難しい学生など、様々な個人的な背景が影響していることが考えられる。また、レベルに達していなくても、大学が落第させることはなく、なんとかなると学生が高を括っているのではないかと現地教師が述べていたが、そうした理由もあるのかもしれない。

日本人教師は1～2学期はすべてのグループにて授業を行っていたが、3学期からはグループを担当することにした。それは、一つには意志の伝達が、簡単な英語でさえで

きないグループ、日本語で日本語を理解させるには明らかに難しいグループにはトルクメン人教師の方がいいだろうというのが理由だった。

5. オグズ・ハン大学の日本語教育の問題点

2016年11月にオグズ・ハン大学に赴任し、予備教育の449名を学部生として送り出した。一つの年度が終了し、約9か月の当地での教育を振り返り、現在、考えている問題点について述べたい。

5.1 日本語教師の不足

赴任当初、全グループを巡回して教えていて、気が付いたことがある。驚いたことに、11月に日本人教師が教え始めた段階で、2グループはひらがなとカタカナと挨拶を学習した程度で、その他の日本語を学習していなかった。その理由は、日本語教員の不足である。

5.1.1 教師の絶対数の不足

22グループが週5コマ学習するためには、延べ110コマ分の教師が必要である。オグズ・ハン大学と教師との契約では、一人の教師の週当たりの受け持ち時間は週12コマである。日本人教師2名が到着するまでは6名だったため、72コマ分しか埋まらず、全体として38コマ分足りなかった。英語の教師のように22グループすべてのグループに担任がいる場合は一人1グループの担任で済むが、日本語の授業は一人で3つのグループを担当しても足りなかった。現地日本人教師の話によると、教師間でやり繰りをし、契約以上の授業を担当しても全く足りなかったという事だった。また、各グループの担任は成績の責任が問われるため、自ずと自分の担当のグループに力を置くことになる。担任のいないグループは2か月間、日本語の授業はほぼ受けておらず、放置されていたという事である。

日本人日本語教師2名が到着した後の8名でも96コマ分しか担当できず、14コマ分の教師が足りないことになった。その分は、教師間で分配し、補ったが、できる限り日本人教師が担当した。特に、2か月間教師がおらず学習が進んでいないグループには日本人教師が入り授業を行った。

5.1.2 教師トレーニングへの影響

教師たちへの日本語教育の必要性は認識していたが、教授法の面でも問題点が数多くあった。授業がテキストをページ毎に追っていき、文型ごとに練習A.B.Cと横断する教え方をしていない教師が多いこと、すべて、現地語であるトルクメン語で単語の導入や

文法説明がなされ、運用能力に著しく欠けるグループがあることなどが把握できた。しかし、必要性は重々承知していながら、トレーニングの時間を作ることは非常に困難だった。現地教師も授業だけでなくイベントの引率等で多忙であり、日本人教師も授業で多忙であったからである。

せいぜい期末試験の採点の後の学生がいない間や、授業の後、少数の集まれる教師だけ集まって行うのみだった。

5.1.3 教師不足の理由

教師の不足は、トルクメニスタンの日本語教育の歴史の問題と教師採用の制度の問題がその理由として考えられる。

トルクメニスタンの日本語教育はまだ歴史が浅い。2007年にトルクメニスタンの日本語教師の唯一の供給源であるアザディ大学で始まった日本語教育であるが、10名定員（2017年度より20名定員）で5年間の大学生活を終えた卒業生は未だ数十名である。トルコや中国の大学で日本語を勉強し教師になった者もいるが、数少なく、絶対数として日本語教師が非常に少ない。加えて、経験のある教師が少なく、アザディ大学を卒業して教師になった者は2017年の段階で全員が30歳以下である。女性教師の中には、結婚や出産だけでなく、幼少の子女の教育と仕事の両立が出来ず、退職してしまうケースもある。オグズ・ハン大学でも2016年度に1名が産休、2017年度に入り学部日本語教師1名が産休、現在妊娠中で2017年度中に産休を取る予定の教師が2名いる。また、幼い子供のベビーシッターが見つからず、大学を休職せざるを得なかった教師も1名いる。

トルクメニスタンの現地教師の仕事は、教育や研究以外にも、学生の管理、イベントへの引率など多岐にわたると述べたが、教師がいなくなれば、グループ編成の変更を余儀なくされ、場合によっては担当グループ数、コマ数も増やさざるを得ず、過度な負担がかかる。教師としての仕事もまだ慣れていない現地教師たちが、授業以外の業務を果たしつつ、授業のコマ数の増加に対応するのは明らかに限界がある。

もう一つの理由は制度の問題である。トルクメニスタンでは、大学卒業後、すぐに卒業証明書をもらうことはできない。トルクメニスタンには5つの州があるが、首都アシガバートの出身者以外は、大学卒業後、出身州で2年間働かなければならない。2年後、ようやく卒業証明書をもらい、どこでも自由に働くことができるのである。例えば、アザディ大学で日本語を学習し、卒業しても、出身州で2年間働かない限り、基本的には学習者の多い首都アシガバートの大学では働くことはできない。この制度の下、アザディ大学の卒業生も5州のいずれかの出身であれば、どれほど成績が良くても、アシガバートにあるオグズ・ハン大学、国際人文開発大学などで働くことはできない。毎年、450

名ずつ日本語学習者が増えていくオグズ・ハン大学にとって教員の確保は非常に大きい問題であるが、それが、ままならないのはこの制度が原因の一つである。2006 年より、オグズ・ハン大学を含め、初中等教育にも日本語教育が急拡大したため、より一層人材難となっている。

その結果、教員の質の低下にもつながっている。トルクメニスタンでアザディ大学以外の日本語教育が始まったのは、既述の通り 2016 年からである。つまり、出身州の学校に勤めても、日本語を教育する現場がこれまではなかった。よって、中等教育の英語やロシア語教師など日本語以外の言語の教員として勤務せざるを得ない教師がいた。また、トルクメニスタンには徴兵制度があり、男性は 2 年間の兵役を義務付けられているため、卒業後、すぐ兵役に入り、退役後卒業証書はもらえるものの、2 年間日本語と全く関係のない生活を送った教師もいる。いずれにせよ、せっかく大学で日本語を学習しても、2 年のブランクの間に日本語を忘れてしまい、卒業時のレベルに戻すのは、かなり難しくなっているのではないと思われる。また、これは、特に会話レベルで顕著に表われていると考える。

5.2 教育管理の必要性

オグズ・ハン大学では、今後も引き続き、毎年 4 百数十名という多数の日本語学習者が増えていく計画が示されている。しかし、上記の様に現場への教師の供給は非常に不安定である。実際に 450 名の学生を集めておきながら、開学当初は 6 名の現地教師しかいなかった。教師数が足りないのであれば、日本語を学習するグループの数を減らすなどの措置が講じられるべきであるが、それもせずに何週間にもわたって、日本語の授業が行われず、放置されていたグループもあった。教師が辞職や休職でいなくなった際のケアも現場任せである。2017 年度は、授業開始後 1 か月で日本語教師が 2 名休職（1 名は 1 か月後に復帰）、新任教師 1 名が 10 月に、1 名が 11 月に加入した。教師の増減により、現場はその度に担当グループが変更になり、担当コマ数も変わる。教師も学生も落ち着いて授業ができない。学生のために、もう少し安定した教育体制を作る必要があるのではないかと考える。

5.3 他機関との交流の制限

同じ日本語教育関係者のスタッフがトルクメニスタンの日本語教育の実態調査に訪問しようとしても簡単には大学に入ることができず、教育省の許可が必要になる。オグズ・ハン大学では、国際交流基金のスタッフが学長に会い、話をするには教育省の許可を得ねばならず、その度に現地日本大使館を通して申請を出さなければならない。ただし、これはオグズ・ハン大学に限ったことではなく、他大学や初等、中等教育機関でも同様

である。また、日本人教師は数少ない日本語学習をしている他大学への入構も制限される。よって他大学の学生との交流はもちろん、現地教師との接触も制限され、たとえ日本語教師間であっても、日本人と他大学のトルクメン人であれば、学内で話をする際には必ず許可を求められる。また、日本大使館主催の文化行事も同様である。日本大使館が天皇誕生日や文化行事等の催しに現地教師や学生を招待してくれても、自由な出席は制限される。未だ数少ない日本語教育者間や学習者間の交流ができないだけでなく、現地教師、学生にとってはネイティブの日本人と触れ合う貴重なチャンスを失ってしまう。もう少し自由に日本人とトルクメン人の交流を行うことができれば当地の日本語教育の活性化に繋がるのではないかと考える。

5.4 学習環境の課題

当地では日本語教材を手に入れることが非常に困難であるため、現在、オグズ・ハン大学には、筑波大学から寄贈された教材、2016年度に国際交流基金から助成をうけた教材、日本人教師が持ち込んだ個人の教材以外には無い。より多くの学生が利用できるようにと考え、図書館と教員室に分けて配架してあるが、本学の学生や教員だけでなく他大学から貸し出しを求められる事もある。数も種類も少ないからである。それに加え、国全体のインターネット環境が劣悪である上に、国によってアクセスが制限されている。オグズ・ハン大学では、ようやく2017年10月より学内でWi-Fiが使用できるようになった。しかし、速度や安定性は決して良好とは言えない。何より、教員のみが使用でき、基本的に学生は利用できない。学生全員がスマートフォンやパソコンなどを所有しているわけではないが、インターネット上にある数多くの日本語学習ソフトを活用できれば、より効率的、自立的な学習を促すことが出来るのではないかと考える。

6. 今後の展望

以上の問題点を振り返り、今後、どのようにオグズ・ハン大学で日本語教育を進めていくべきかについて、考察したい。以上の問題点は全てがすぐに解決される問題では当然無い。とりわけ、トルクメニスタンという国や大学の制度の問題に深く関わっているものは、直ちにすべてを改善することは不可能である。それは、トルクメニスタンにおける規則や高等教育のあり方の歴史があるからである。それを踏まえ、特に必要だと思われる、教師不足と教師研修の改善を中心に考察する。

6.1 トルクメニスタンの制度について

様々な制度や制約により学習者の教育環境が損なわれていることが最大の問題である。当地において日本語学習者が増加し、学習者数の多くを担うオグズ・ハン大学では、特

にそのことを感じる。もう少し柔軟な対応をしてほしいと感じる事は多々あるが、卒業後の2年の出身地への赴任制度、外国人との接触制限など、制度に関わる問題は、変更は簡単ではない。しかし、在トルクメニスタン日本大使館が当地の日本語教育に強い関心を示してくれており、また協力的であることは心強い限りである。2016年度、2017年度と引き続き、現地の日本語教育関係者を招き、教育現場の問題点を聞き取ってくれた。

大使館からは、大使、次席、広報文化担当の3名、教育関係者からは国際交流基金の日本語専門家及び指導助手と日本人教師が参加した。2017年度は現地日本語教師も招き、話を聞きたいとの大使の意向だったが、現地教師の参加には教育省の許可が必要なため、2016年同様日本人のみとなった。こうして当地の日本語教育関係者から聞き取った問題点や要望は、大使をはじめとした大使館スタッフがトルクメニスタンの政府関係者と面談する機会に伝えられ、解決策の提案が示された。2017年11月には大使がトルクメニスタン内閣府においてトイリエフ副首相（教育担当）と日本語教育について意見交換を行い、教師不足の件やその原因となっている出身地で2年間勤務しなければならない規定の緩和などの提案をされた。またその席では日本語教育関係者の自由に学校訪問が出来る制度作りへの要望、日本語弁論大会の全国的規模への拡大、その他の日本語教育関係の様々な懸案事項についても話し合われたとの詳細なレポートが大使館より、当地の日本語教師に送付されてきた。教育現場の問題点がトルクメニスタンの教育担当大臣に伝わったのは非常に大きい成果だと思う。

当地の大使館はその他、文化イベントや日本語実践クラブ（アザディ大学で行われているアシガバート在住日本人と学生との対話）などの企画を通して、日本の文化を紹介するだけでなく、日本人とトルクメン人が触れ合うチャンスを作っている。しかし、肝心の現地教師や学生の参加が制限されることも多い。そのような規制の緩和も含め、制度については大使館と連携を密に取り、現場の要望を伝え、大使館からトルクメニスタン政府に働き掛けていただき、少しでも開放的で働きやすくなるようにしていきたい。

6.2 今後の教員研修について

オグズ・ハン大学では毎年450名の予備教育学生を受け入れ、そのすべてが日本語学習者となる。学習者数だけでなく、教員数もトルクメニスタン国内では突出している。本校の現地教師の質の向上は、当地赴任以来の課題であったが、日本人教師の授業の担当コマ数が多く、なかなか研修に手が回らない状況だった。しかし、2017年12月現在の予備教育の現地日本語教師は8名と僅かではあるが増員され、日本人教師の負担が減り、1週間に1度は行えるようになった。現地教師たちは、皆、非常に若く、日本語のスキルとともに教授法なども学習したいという意欲に溢れている。今後の当地での日本語教育を背負うこれらの若い現地教師たちには、十分な研修が必要であろう。オグズ・

ハン大学の日本語教育の充実のためだけではない。日本語教育が始まって未だ10年程度の黎明期であると言っていい当地において、継続して日本語教育が続けられるならば、その成否は現在の若い教師たちにかかっていると考え。パイオニアである現在の若い教師と学習者が、必ずや今後リーダーとして当地の日本語教育の柱となっていくだろう。そのため、現在は現地教師の育成という点でも非常に大切な時期である。こうした現状認識は、国際交流基金の現地スタッフとも共有している。現在は基金スタッフの大学への立ち入りが制限されているが、緩和されればオグズ・ハン大学の教師研修への協力を仰ぎながら、現地教師の質の向上もより期待できよう。

また、現状では現地教師も、その実力を日本人に対して発揮出来る場が極めて限られている。日本人とトルクメン人が直接触れ合う場が少ないのが原因である。日本語弁論大会や各種日本人関連のイベントを通して、当地在住の日本人との交流を図り、会話スキルなどの向上も目指したいと考えている。また、当地の国際人文開発大学は東京外国語大学との学術協定を締結しており、2017年11月の学長訪問で学生の交換留学の覚書が締結された。こうした大学との教師間、学生間の交流が進められることを望む。

7. 終わりに

オグズ・ハン大学の隣に140番学校と呼ばれる新設校がある。初等教育から日本語を教え、中等教育では日本語でトルクメン語以外の科目の授業を行い、卒業後はオグズ・ハン大学に進学させたいと考えから開校したとのことである。トルクメニスタン政府は、オグズ・ハン大学を新たな工学教育を行う大学としてだけでなく、日本語教育の拠点にしたいとの考えもあるようである。

また、オグズ・ハン大学には、言語センターと呼ばれるスペースがある。英語、日本語、ロシア語、トルクメン語の4つのブースがあり、教材だけでなく、各国の衣服や生活用品、民芸品などの展示があり、日本語のブースには浴衣や箸や茶碗などが展示されている。オグズ・ハン大学では近々このスペースに講座やイベントを行う特別な日本語センターを設置するプランもある。当地における日本語教育、日本文化発信の中心となるべきであるとの現学長の考えがあり、大学の放課後、一般人を相手に日本語教室を開こうという案もかなり具体化しつつある。

遅々たる歩みかもしれないが、2017年度は開学初年度よりも僅かであるが、教師研修の定期的な実施やインターネットの導入など進歩を見せている。在トルクメニスタン日本大使館や国際交流基金と活動の連携を深め、協力を仰ぎつつ、オグズ・ハン大学の日本語教育を進めていきたい。

参考文献

国際交流基金 HP <https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/turkmenistan.html> (2017 年 10 月 9 日)

宇山智彦他 (2010) 『中央アジアを知るための 60 章』 第 2 版 明石書店

注

1. 第 5 回アジアインドア&マーシャルアーツゲームズ
2017 年 9 月 17 日～ 27 日の 11 日間にわたり、首都アシガバードで開催された。
(https://www.joc.or.jp/games/indoor_martialarts/2017/) 2018 年 1 月 5 日閲覧
2. 筑波ランゲージグループ (1991) 『Situational Functional Japanese Vol:1 NOTES』 『Situational Functional Japanese Vol:1 DRILLS』 凡人社
3. スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語初級 I 本冊』 スリーエーネットワーク
4. 加納他 (2010) 『Basic Kanji Book VOL.1 基本漢字 500』 凡人社
5. スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語 初級 I 翻訳・文法解説 英語版』 スリーエーネットワーク
スリーエーネットワーク (2006) 『みんなの日本語 初級 I 翻訳・文法解説 ロシア語版』 スリーエーネットワーク
6. 牧野他 (2003) 『聴解タスク 25』 スリーエーネットワーク
7. 平井他 (2000) 『書いて覚える文型練習帳』 スリーエーネットワーク
8. スリーエーネットワーク (1999) 『標準問題集 I』 スリーエーネットワーク

2016 年度の予備教育の教材は上記の 3～8 である。

2017 年度からは、3.5 の教材については第 2 版、4 については新版に変更した。

3. スリーエーネットワーク (2012) 『みんなの日本語初級 I 第 2 版 本冊』 スリーエーネットワーク
4. 加納他 (2015) 『Basic Kanji Book VOL.1 基本漢字 500 新版』 凡人社
5. スリーエーネットワーク (2014) 『みんなの日本語初級 I 第 2 版 翻訳・文法解説 ロシア語版 (新版)』 スリーエーネットワーク